

刊 行 物 の 名 称	発行年月日	頒布価格	送 料
日本気象学会大会予稿集			
昭和37年秋季大会		200円	120円
〃 40年春 〃		200	120
〃 46年秋 〃		550	160
〃 47年春 〃		600	160
〃 47年秋 〃		600	160
〃 51年春 〃		1000	—
〃 51年秋 〃		1000	—
気象英文用例抜萃集	1960	500	120
First Symposium on Wind Effects on Structures in Japan (1970) (Summary of Papers)	1970. 5.	180	120
文部省 学術用語集 (気象学編)	1975. 10.	1200	120
Proceedings of the WMO/IUGG Symposium on Numerical Weather Prediction in Tokyo	1969. 3.	非1400 1000	240
外国文献集			
No. 3 Tropical Cyclone		各1500	実費
No. 6 Cloud Physics Part 1			
No. 10 Radar Meteorology Part 1			
No. 13 Long Range Forecasting			
No. 14 Tropical Meteorology			
No. 15 Dynamic Meteorology Part 1			
No. 16 Dynamic Meteorology Part 2			
No. 18 Upper Atmosphere			
No. 19 Stratospheric Circulation			
No. 20 Micro Meteorology			
No. 21 Convection			
No. 22 Numerical Weather Prediction			
No. 23 Meteorological Statistics			
No. 24 Satellite Meteorology			

≡≡≡ 支部だより ≡≡≡

日本気象学会九州支部の歩み

— その 1 —

九州支部幹事 小島隆義

1. 九州支部発足のころ

学会本部の記録によれば、九州支部は昭和28年設立となっている。ところが、支部自体の記録によると昭和29年7月発足となっているので、その間の1年余りはおそらく名目だけの支部だったかもしれない。

“天気”を繰ってみると、昭和30年11月に学会本部は

定款を改正して新発足したとあるので、あるいはこれに関連して支部が発足したのかもしれない。今となっては詳しいことはわからない。

ともかく、全国組織の一環として生まれたものの、東へ行くか西へ進むか、まったくコースも定まらないような状況であった。九州支部は関西支部と同時に生まれた

ようだが、関西支部に比べて陣容も小さく、これという活動の実績は残っていない。

当時、気象台では年2回、春と秋に気象研究会を開いていた。これは支部講演会をひっくるめた行事として行なっていた。つまり、関係団体に案内状を送ったり、学会員に自由に参加してもらったりした。また、討論で有益な意見を聞かせていただいたり、特別講演をお願いしたりした。武田京一、坂上 務（九州大学）、藤田哲也（九州工業大学）、山本武夫（山口大学）といった方々にお世話になっている。

九州支部の機関誌「九州支部だより」は昭和34年8月に第1号を発行している。B5、8ページの小冊子である。日下部正雄（理事）が発刊の目的を述べ、間野浩（理事）が“支部発展のために”という小文を寄せている。また、倉石六郎（支部長）が“30年前の気象学会”つまり昭和初期の学会を紹介している。この支部だより発行で、初めて支部と支部会員との結びつきが生まれたわけである。

2. 学会秋季大会を福岡で

昭和34年11月、日本気象学会秋季大会を初めて福岡で開催することになった。九州支部としてはもちろん初めての一大行事であり、管区気象台あげての支援のもとにこれを遂行することになった。支部関係者はずいぶん苦労もした。しかし、その反面では大会を行なったおかげで、支部の存在が管区気象台の内部で確立したというプラスの面もあった。

当時、支部長は管区台長（倉石六郎）、常任理事は測器課長（松岡保正）、事務局と呼ぶようなものもなく、官の調査研究の組織とはまったく無縁の存在であった（これが本来の姿かもしれない?）。これでは大会開催にぐあいが悪いということで、昭和34年5月の改選で、調査課長（日下部正雄）を常任理事に、事務局を調査課に置くなど、大会のための態勢づくりがなされた。

大会は非常に盛会だった。初めは辺境の地、九州開催では参加者は少ないのではないかと思われた。ところが、案に相違して講演数104という盛況に喜びの悲鳴

をあげた。2会場の予定を3会場に増やした。会場は九州大学の協力により農学部防音講義室を借用できてありがたかった。おかげで、福岡空港を発着するジェット機の騒音に悩まされずに済んだ。

このほか、博多駅での受付、タクシー・宿舎の手配、懇親会等々、事務局長の任にあった日下部正雄の細部に手の届く諸手配に大会は無事終了した。

3. 九州大学との交流

九州支部が生まれる前のことである。伊藤徳之助（九大理教授）はわが国で初めて人工降雨実験を試みた。この人工降雨の効果をめぐる論争があり、これが尾をひいていたかどうかかわからないが、支部が生まれるころの気象台と九州大学理学部とは必ずしもピッタリいっていなかった。九州支部の“うぶ声”が小さかったのはこれが原因だったかもしれない。

昭和34年、沢田竜吉が伊藤の後任として赴任してきた。いっぽうすでに、石丸は勇退していた。こうして気象台側と九大側とで学会支部をもり立てていく機運が高まってきた。

当時、気象台で行なっていた気象談話会がマンネリ化したきらいがあった。そこで、これを発展的に解消し、九大、その他の学会員を含めた気象懇話会として発足させた。会員制とし、気象台・九大理・九大農の持回わりとし、論文紹介、研究発表などを行なうものであった。

この会は土井謙二（理事、調査課長）などの努力によって順調に発展し、会員数30名以上にもなった。会のあとで研究施設を見学できるなど、思いがけないプラスの面があった。

しかし、10年近く続いたのち、会はひと月延ばし、ふた月遅れとなり、ついには姿を消してしまった。この理由としては、現業官庁の気象台、研究を職とする大学、それも理学部と農学部、つまりは討論の場が必ずしも共通していないためであろう。

（文中敬称略）。

——つづく——